

1. 環境モニタリング調査

1) 調査内容

調査実施日：2024年1月29日

- ① 海域水質調査
- ② 水温連続調査
- ③ 被度調査

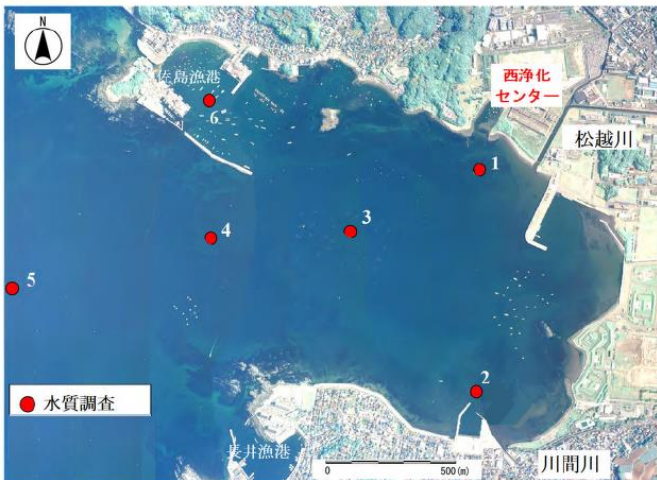


図-1

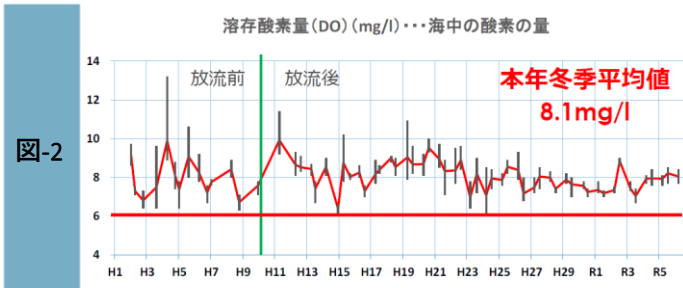
環境モニタリング調査

小田和湾の健康診断的な調査であり、平成元年度から概ね春季と冬季の2回実施している。本年冬季に実施した、水質調査の結果、いずれも変動範囲内であった。

2) 調査結果

① 海域水質調査 (図-2～7)

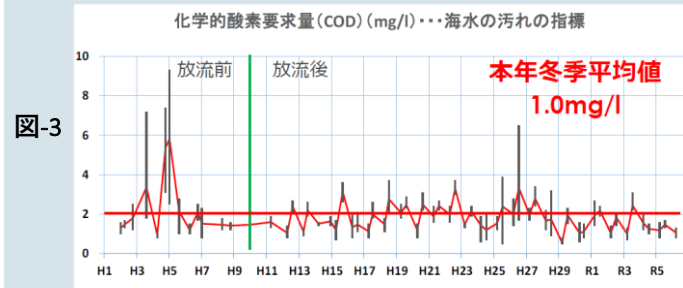
各グラフには、6地点の平均値を赤線で、最高値と最低値の幅を灰色の縦線で示した。



溶存酸素量(DO):安定

海水中に溶け込んでいる酸素量で、この値が低くなると魚介類が生息しにくい。本年冬季では、これまでの変動範囲内であった。

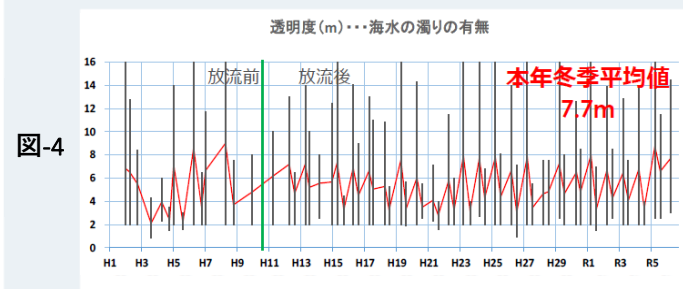
基準値：6mg/l以上(参照：水産用水基準)



化学的酸素要求量(COD):安定

海水の汚れの指標である。本年冬季では、これまでの変動範囲内であった。

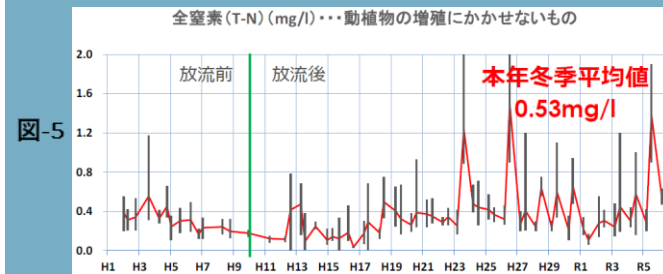
基準値：2mg/l以下(参照：水質汚濁に係る環境基準)



透明度：安定

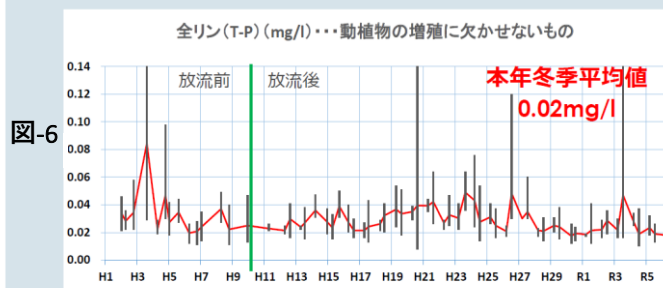
海水の濁りの指標で、小田和湾では春季に低く、冬季に高くなり、また湾奥部で低くなり、沖合で高くなる傾向にある。

本年冬季では、これまでの変動範囲内であった。(Stn.2井尻漁港外の最大水深は-2.0m)



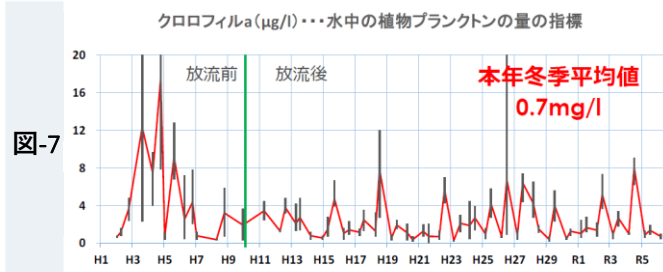
全窒素(T-N):安定

動植物が育つために必要な栄養分である。ただし、全窒素が多くなりすぎると富栄養化の原因になる。本年冬季は、これまでの変動範囲内であった。



全リン(T-P):安定

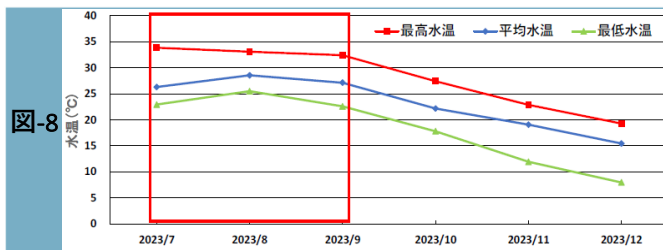
リン化合物の総量で、全窒素と同様に動植物の増殖に欠かせないものである。本年冬季では、これまでの変動範囲内であった。



クロロフィルα:安定

海水中の植物プランクトン量の指標である。放流開始後のH18,H22,H26,H27では、赤潮発生により高い値を示した。本年冬季は、これまでの変動範囲内であった。

② 水温連続調査 (図-8)

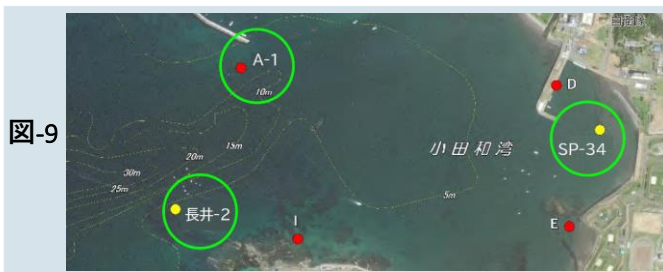


調査結果

7月～9月は最高水温が30℃以上を記録した。アサリの成長に最適な水温は10月であった。

③ 被度調査 (図-9)

湾内同一地点の藻類の状況を2年に1回観察し、藻類の増減を確認する。



調査結果

左図で示す地点において、2022年の調査結果と同様にカジメやコアマモの着生が確認された。